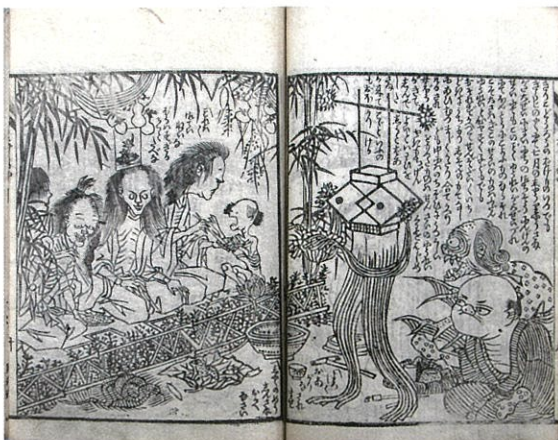


2 モノケへの眼差し ~高橋清治郎と大正時代の民俗学者たち~



妖怪一年草 文化5年(1808) 東北大学附属図書館蔵
十返舎一九の作、勝川春英の画である。妖怪たちが江戸時代の庶民の年中行事を楽しむ姿が描かれている。



瀧口内舎人渡辺綱 文化12年(1815)~天保13年(1842) 村田町歴史みらい館蔵
歌川国芳 大判



大江山呑香退治 安政5年(1858) 村田町歴史みらい館蔵
歌川芳艶 大判 三枚続



鎮守神の鬼退治 明治29年(1896)旧9月17日 三吉神社蔵



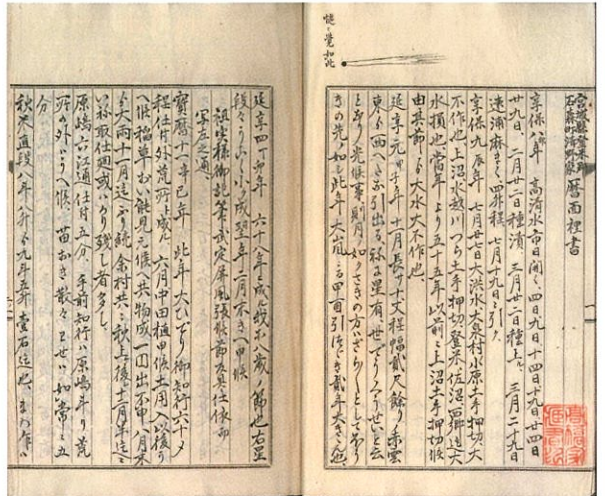
頼光四天王と妖怪 天保年間(1830~1844) 村田町歴史みらい館蔵
歌川貞秀 大判 三枚続

高橋 清治郎

高橋清治郎は、明治~昭和にかけて活躍した郷土史家である。登米郡南方村(登米市南方町)に生まれ、南方村本地尋常小学校で校長を務めた。清治郎は、地域の古文書の書写や青島貝塚(南方町)などの発掘、民俗学研究(当時は土俗学)を行ない『南方村誌』の出版など終生に渡り郷土史研究に取り組んでいた。民俗学分野では、柳田國男が刊行した『郷土研究』に投稿したのを契機として、佐々木喜善やニコライ・ネフスキーなど他地域の研究者とも積極的に交流し、登米地方の事例を紹介している。



『来翰集』 個人蔵
主に大正時代の清治郎宛の書簡等をまとめたもの。柳田國男、佐々木喜善、ニコライ・ネフスキーなど20名分の書簡が収録され、当時の交友関係を示す貴重な資料である。



『暦面裡書』 個人蔵
近世~近代にかけて登米地方周辺の諸家で書かれた資料である。原本は暦の裏面にその年の様々な出来事が書き留められている。清治郎はこの資料を借り受けて整理し、少なくとも10冊の書写本を残している。

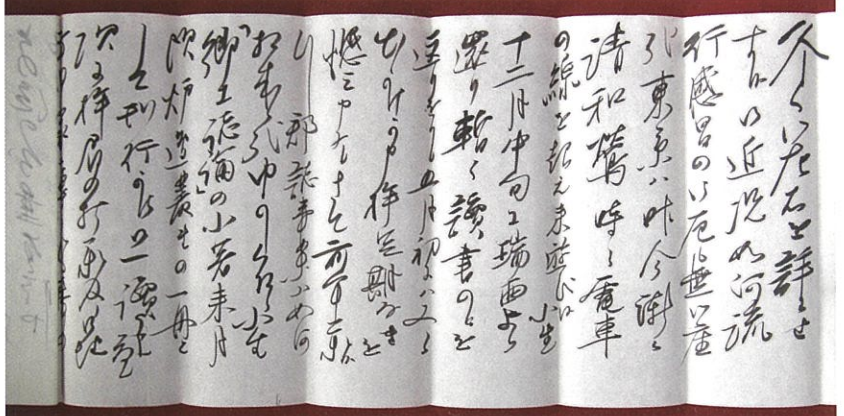


高橋清治郎所蔵資料拓本 岩手県立博物館蔵
網場貝塚(登米市米山町)、平貝貝塚(南方町)の遺物である。



柳田 國男
写真提供: 遠野市立博物館

日本民俗学の創始者。大正9年(1920)8月上旬に登米地方を訪れ、清治郎宅に一泊している。登米地方滞在中の柳田は、柳津虚空蔵尊の訪問や聞き取り調査、板碑調査を行なっている。また、当時編纂中であつた『登米郡史』について登米郡長半田卯内等と会談し、助言を行なっている。



高橋清治郎宛柳田國男書簡 大正11年(1922)2月21日 個人蔵
清治郎が書写していた「暦のうらの年代記」(『暦面裡書』)の出版依頼をしている。タイトルも「登米郡年代記」と決まっていたが、未刊となってしまった。

コラム ~ 鬼 ~

登米市内の鬼伝説は、坂上田村麻呂伝説と関連するものが多く残っている。田村麻呂に退治された悪路王の目が落ちたという「鬼の目」(石越町)、同じく退治された大武丸が人畜を調理した「鬼のまな板」(南方町)などである。これらは、田村麻呂に退治される存在として鬼を伝えている。このほかにも赤鬼青鬼が刀鍛冶を手伝っていた「嶺鍛冶屋」(中田町)など登米地方には様々な鬼伝説が残されている。



鬼のミイラ 村田町歴史みらい館蔵

ニコライ・ネフスキー 写真提供:小樽商科大学附属図書館

ロシア出身の民俗学・東洋学・言語学者。登米地方のオシラサマ・オカミサン（口寄せ巫女）の調査依頼で交流が始まった。大正9年(1920)8月28～29日に清治郎を訪ねて同宅に一泊し、オシラサマ・オカミサンの調査やザシキワラシ、河童などの伝承を書き留めている。



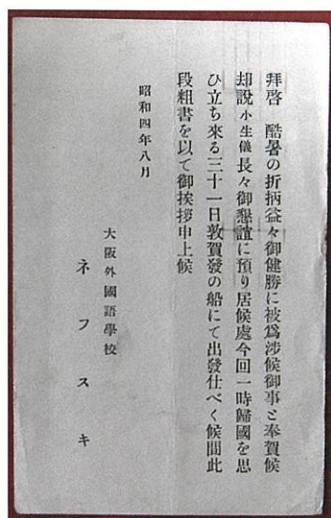
オシラサマ 個人蔵

男神・女神の一对である。男女の顔が彫られ、絹布・綿布で包まれている。男神には伊弉諾尊、女神には伊弉冉尊と墨書されている。



イラタカ数珠 南方歴史民俗資料館蔵

オカミサンが儀式に使用した。動物の骨や牙・爪、玉、貝殻などと寛永通宝・天保通宝を組み合わせて製作された。



**高橋清治郎宛
ニコライ・ネフスキーはがき
昭和4年(1929)8月
個人蔵**

ソ連(現ロシア)への帰国直前に旧友たちに送った挨拶状の一枚。表面は、直筆である。消印は、「大阪玉造」、「8.25」となっている。



オコゼ(タツノオトシゴ) 当館蔵

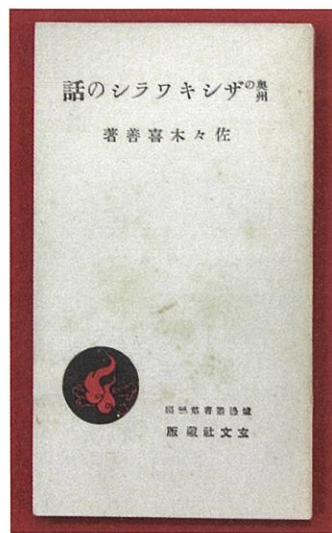
旧仙台藩領内では、タツノオトシゴをオコゼと呼んでいた。ネフスキーは、佐沼周辺の猟師の習慣として、沢山の紙でオコゼを包み獲物が獲れると一枚ずつ剥すと記録している(オミーグジサマ)。

コラム ～ 河童 ～

ネフスキーは、佐沼町(登米市迫町)周辺に河童の話が沢山あるとしている。河童は子供の姿をしていて、川で遊んでいる子供を襲い肛門から手を入れハラワタを抜き出して食べてしまう。昔は河童が良く獲れたが今は獲れないと記している。このほかに登米地方には、東和町の「さいかち淵」には河童の親子が住んでいた話、登米町には、北上川で兄弟二人が河童に引き込まれ溺死した話、「葛菟淵」で嫁っこ(花嫁)が河童に引き込まれた話が残っている。また、登米町などでは6月の天王様の祭りを河童様の祭りとも呼び、初胡瓜を神棚に供え川へ2～3本流すなどし、河童とかかわりの深い磯良神社が石越町に所在するなど登米地方には様々な河童伝承が息づいている。

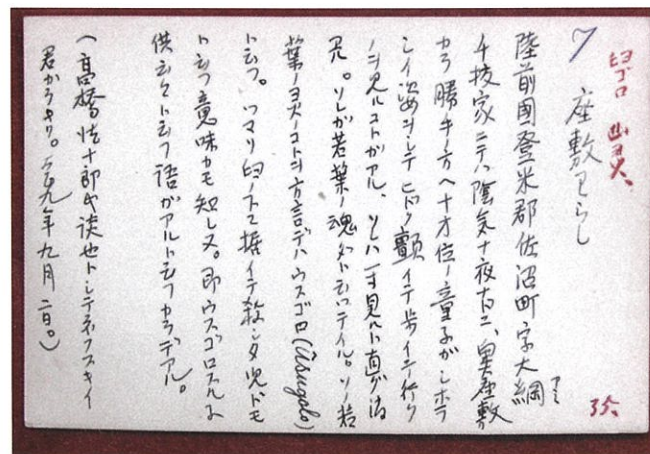
佐々木 喜善 写真提供:遠野市立博物館

作家・民俗学者。登米地方のザシキワラシの調査依頼で交流が始まった。喜善は、清治郎から登米郡南方村の事例提供を受け、自身の『奥州のザシキワラシの話』に収録している。また、後に発表した「ザシキワラシの話 1」にはニコライ・ネフスキーから佐沼町の「若葉の魂」、「ザシキワラシの話 2」で中道等から登米町の事例提供を受け紹介している。



**『奥州のザシキワラシの話』
大正9年(1920)2月20日
個人蔵**

清治郎が提供した南方村の佐々木家の事例が紹介されている。ザシキワラシは12～13歳の女兒で、屋根葺き替えが終わった夕方に村人大勢が目撃したこと、常にでい(奥座敷)に居ると信じられ時々座敷を掃く音などがしたと記されている。ただし、最近では出ないと噂されていると記されている。

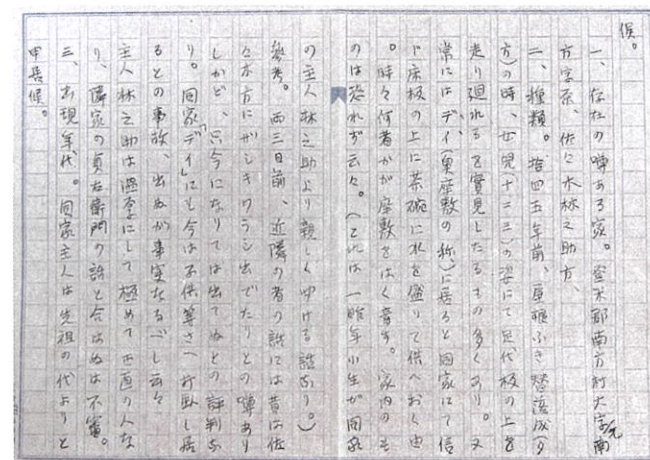


ザシキワラシ調査カード 遠野市立博物館受託資料

佐沼町の某家に現れる白ゴロ(圧殺)にされた赤子の魂(若葉ノ魂)を記録している。喜善は、ザシキワラシが若葉の魂と関係があるのではとしている。

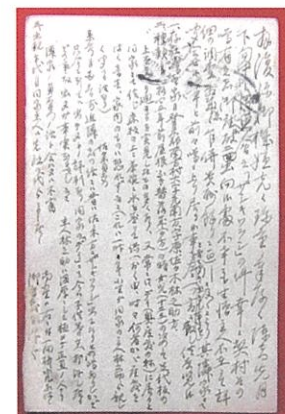
コラム ～ ザシキワラシ ～

清治郎の調査によると佐々木家のザシキワラシは12～13歳の女兒であったが、この話とは異なる話が同家に伝わっている。ご当主の話によるとザシキワラシは佐々木家が保有していた二振の名刀の霊であり、この刀が持ち出されたためにザシキワラシが出なくなると語り継がれているとのことである。なお、当家の屋号を「メイケン」という。また、ザシキワラシは、髪の毛の長い男児で子供たちが家の内外で遊んでいると出てきて一緒に遊んでいたと伝承されている。

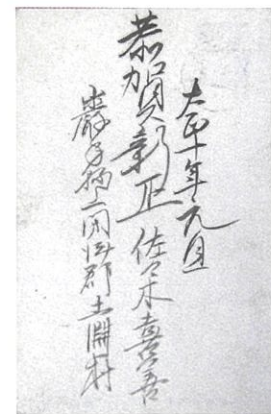


**『奥州のザシキワラシの話』草稿
遠野市立博物館受託資料**

清治郎からもたらされた事例がまとめられている。宮城県内では、ほかに毛利総七郎(石巻市)、常磐雄五郎(仙台市)などに調査依頼を行なっている。



**佐々木喜善宛
高橋清治郎はがき
大正8年(1919)2月19日
遠野市立博物館受託資料**
佐々木家の事例を伝えている。往復はがきで使用されている。



**高橋清治郎宛
佐々木喜善はがき
大正10年(1921)元旦
個人蔵**
清治郎宛の年賀状である。